

海の向こうにでて見れば

(10)「お・も・て・な・し」の表裏

石田 佳子

約4年前前からマレーシアの首都クアラルンプールで暮らしています。普段は日本人がほとんど居ない地域に住み、日本人のコミュニティと交わらずに過ごしているため、先日「いつの間にか私は、“日本の常識”を忘れていたかもしれない？」と感じる出来事に遭遇しました。そこには異文化に染まることで生じた私自身の変化と、日本人の一面が表れていると思うので、今回はそれについて振り返ります。

日本人の「お・も・て・な・し」

クアラルンプールに住む日本人（退職者）の多くは、S氏とその奥様を中心とする日本人のコミュニティに属しています。そのコミュニティは、相互援助と「家族同然の親しい交流」を目的とするもので、外国暮らしの不安や寂しさを感じる人には、役立っているようです。前述したように、そこから離れて暮らしている私たち夫婦ですが、移住前には現地の情報源としてS氏の運営するSNSを活用させてもらったこと、近年S氏（83歳）の健康状態に不安が見え始めたため「S氏が元気なうちにもう一度お会いしてお礼を言いたい」と考えたことから、先日初めてS氏の奥様が主催するパーティに参加しました。

それはS氏の誕生祝いを兼ねた新年会で、S夫妻が毎年自宅を開放し催しているものです。会場・料理などは奥様が用意すること、しかし参加者にも得意な料理を一品とか好きなお酒を一本持参してもらえると嬉しいこと、それが出来ない人は寄付を置いてくれても良いし、当日台所を使って料理を作ってくれても良いことなどが、事前にSNS上で奥様から告知されました。私は「主催者側の負担を減らすため、ポットラック形式にするんだな」「その方が気を遣わなくて良いな」と考え、大皿料理を2品持って参加しました。

当日は、約40~50人の日本人が参加し、食べきれないほどの手料理とお酒が持ち寄られました。途中から一人の客人（元観光省高官のマレーシア人女性）が加わると、彼女の前には少量ずつ取り分けられた多種類の料理が供され、参加者全員が一人ずつ歩み出て英語で自己紹介をするという特別待遇が（奥様の指示で）施されました。これはマレーシアではあ

り得ないような「お・も・て・な・し」だと思えます。私はS氏へのご挨拶を果たし、お料理とお酒と会話を楽しんで、満足して帰途に着きました。

「お・も・て・な・し」の舞台裏

しかし、帰宅後（会員なら誰でも見られるSNS上で）パーティのお礼を伝えた時のことです。S氏の奥様から「今年は初参加なので大目に見るけれど、次回からは貴女もキッチンに入って働いてね。」との叱責を受け、びっくり仰天してしまいました。他の女性たちには「準備から後片づけまで手伝ってもらって助かった。」と言っていましたから、そのパーティは、表向きには「無礼講で」としながら実は細かいルールが言外に強制される、フォーマルな（仕事のような）集まりだったようです。

そう言えば、パーティの最中「なんとなく、男性ばかりが座って飲んでいるな〜？（女性のほとんどが台所の中か周辺に集まっていた。）」とか、「食べきれないほど料理があるのに、まだ作るのかな？（延々と料理をし続けている女性もいました。）」とか、「それにしても、なぜ紙皿と紙コップを使わず、高そうな食器を使うのかな？（黙々と皿洗いをしている女性もいました。）」といった疑問も頭に浮かびましたが、「きっと各人が好きなように楽しんでいるのだろう！」と思い直し、飲んで喋って……マイペースに楽しく過ごした私です（大笑い）。

「平場」ではない日本人社会

おそらくこの集団には（年齢や参加頻度や貢献度などによる）ヒエラルキーが存在し、私はその最下層に属しているにも関わらず、下働きを“自ら買って出る”という身分相応の行動をしなかったために、蟹蹠を買って「空気が読めないダメな奴」というレッテルを貼られたのだと思えます。どうやら私は、ローカルの人たちとの気楽な交流に慣れ過ぎて、「公には本音でなく建前を言うので、言われた事を真に受けてはいけない」とか「上下関係を意識して、上の人の真意を”忖度”しなければならない」という“日本人（あるいは海外在住日本人コミュニティ）の常識”を忘れていたようです。

しかしながら、合理的に考えれば、すでに職場も肩書きも持たない退職者たちの集まりに、「フォーマルな（仕事のような）集まり」のルールが持ち込まれることには、違和感を禁じ得ません。また、思い返せば5,6年程前、まだ日本に居て初めて関連オフ会に参加した時、ボソボソとしか喋れなかった（元々大勢の前で話すのが苦手な）私が、いつの間にか「身振り手振りつきで長々と（英語の）演説していたよ」と後から夫に指摘されるほど（冷や汗）「他人の目を気にしない」「空気が読めない」という鈍感力を身につけていたことに初めて気がつき、我ながら驚きました。

自分軸（自分のニーズ）が頼りの海外生活

多様な人種が共存しているマレーシアでは、「他人の目を気にする」より「自分のニーズを大事にする」ことが、許されています。（ただしそれ故に、物事が指示/約束の通りに実行され難いといった弊害もあるのですが。。）いずれにしろ、相手のニーズを先取りした“おもてなし”や“付度”などの複雑なコミュニケーションは、望むべくもありません。良くも悪くも「多くは期待できないし、期待されない」環境だと思います。

だから、公に告知したことは「言葉通り」に受け取られますし、もし正直に「料理やお酒を持参しても、寄付はすること。」とか「女性はもてなす側として、台所で働くこと。」などと伝えれば、誰も（特に女性は）参加しないでしょう。また、「あらかじめ手の込んだ料理を用意し、身なりを整えて参加して、男性たちが飲み食いしている間中、笑顔を絶やさず台所で働くのが、日本女性の美德なの。」などとローカルの人に説明したら、「えっ、それは凄いいね～！でも、それで楽しいの？」と不思議がられることでしょう。

他人軸（従順さ）が美德の日本人社会

「もちろん楽しいはずはない！」と私は思います。しかし、彼らは「この集団の中でしか生きられない」と信じているので、そこから排除されないために、そのルールを受け入れている（振りをしている）のだと思います。そのような集団の中では「自分はどうしたいか？」を棚上げにして「集団（みんな）の利益を優先する」べきであり、そのためには「空気を読む」ことや「他人の目を意識する」ことが期待される、適応的な行動になるでしょう。

今の私の実感としては、「日本人は、個人として付き合う分には真面目で優しくナイスな人が多いけれど、集団になると妙なルールや圧力を醸し出して怖くなる」気がするのです。そしてこれは、（“村”社会と揶揄されることもある）海外在住日本人のコミュニティだけに限られたことではなく、日本人の集団や社会には多かれ少なかれ見られる傾向ではないでしょうか。

「個人の満足より、集団（みんな）の利益を優先するべきだ」というのは、聞こえの良いスローガンだと思います。しかしその結果として、個人の内面が弱体化するとしたら？犠牲や皺寄せを強いられるのが、集団の中でも弱い立場の個人だとしたら？.....何かが間違っていると言わざるを得ません。そもそも集団をつくる目的は、「一人では弱い個人が力を合わせて生き易くするため」だったのではないのでしょうか。その集団が大きくなり、力を持つに従って、集団が個人を抑圧し、潰すようになってしまうのは、本末転倒だと私は思います。

「それは誰のため？」と「逃げる手もあり！」

私自身は、「自分のニーズを大事にする」ことが許される集団の中に居る方が、エンパワメントされます。「家族同然の交流」や「おもてなし」は享受できなくても「自分はどうか？」に集中することで得られる満足感には手応えがあるため、(たとえ失敗しても)やる気と自信が湧いて来るのです。それとは逆に、「他人からどう思われるか？」を気にして自分のニーズを蔑ろにしていると、「他者からの評価」は得られたとしても)自分の内側が希薄になり「虚しさ」に捕らわれ易くなるように思うのです。

近年の日本のニュース(鬱や自殺や過労死、パワハラやブラック企業、お祭り騒ぎのような不倫報道など)を見ていると、社会全体の要求水準が高くなり過ぎ、無用なストレスを生み出して、その発散対象を求めているかのように感じられます。だから、弱い立場の日本人には、「もしあなたが周囲から、理不尽なほど高い期待を押しつけられていると感じたら、『それは何の(誰の)ためになるのか?』を見抜いてね!」「場合によっては、『逃げる』という手もありだから!」と伝えたいと思います。